一般型と小規模型の高齢者通所施設における 併用利用者の「かかわり方」の比較考察

COMPARATIVE CASE STUDY ON USERS' SOCIAL BEHAVIORS BETWEEN AT A DAY CARE CENTER AND AT A MINI DAY CARE CENTER

西野達也*, 長澤 泰**

Tatsuya NISHINO and Yasushi NAGASAWA

One of significances of day care centers for the elderly is thought to be as a place for social interactions among users. However, there was not an argument from that point. The purpose of this study is to discuss on relations between extents of centers and users' social behaviors.

6 comparative case studies of each individual at a mini day care center and a day care center, were carried out. The conclusions are as follows.

1. In some cases, there could be seen phenomenal differences between 'way of social behaviors' at mini day care centers and that at day care centers.
2. By examinations of their 'attitudes' toward centers, the differences could be thought not as effects from environments, but as results of their mutual adaptations to 'situations'.
3. 'Identical way of social behaviors' means putting together their own 'attitudes' and 'ways of social behaviors'.
4. We should not give a conclusion whether mini day care centers or day care centers are proper from the point of social interactions.

Rather the most important point is that to produce 'situations' where each user can behave in identical way in each center.

Keywords: *Day care centers for the elderly, Mini day care centers, Way of social behaviors, Attitude, Identity, Situations, Situation of social interactions peculiar to each place with activities*

デイサービスセンター、ミニデイ、かかわり方、態度、その人らしさ、場の状況、コミュニケーション状況

1. 研究の背景と目的、位置づけ

現行の介護保険制度において高齢者通所介護施設（デイサービスセンター。以下、一般型デイと略す）は要介護状態等の高齢者に対して、利用者の社会的孤立感の解消及び心身の機能の維持並びに利用者の家族の身体的及び精神的負担の軽減を図るための場とされている^{註1)}。特に物理的環境の計画においては、デイの本質的役割がケアの授受の場のみではなく、高齢者のコミュニケーションの場でもあることを重視すべきであると思われる。しかしながら、これまでコミュニケーション行為の点から通所施設的环境を捉えた研究は少ない。

また、近年、高齢者居住施設の分野においては、特養のユニット化やグループホーム等、生活単位の小集団化が推められている。同様に通所施設においても実験的にミニデイサービスセンター^{註2)}（以下、ミニデイと略す）が開所されている。集団や空間の規模、構成等が異なる一般型デイとミニデイにおいて、利用者のコミュニケーション行為は異なるのであろうか？また、もし異なるのであれば、その差異はどのようなものであろうか？

本稿の目的は、かかる問題意識に基づき、高齢者のコミュニケーション行為の観点から通所場の環境について論じることである。

2. 研究の方法

2-0. 具体的課題と方法

本稿の第一の課題は、一般型デイとミニデイという場の相違によって利用者のコミュニケーション行為に差異はあるのか、を明らかにすることである。またその様態と要因についても論じる。次に第二の課題として一般型デイとミニデイに特有のコミュニケーション状況を明らかにする。上記の具体的課題の考察を通じてコミュニケーション行為の観点から通所場の環境の質について論じる。

利用者のコミュニケーション行為の特徴を捉えるために、30人前後の集団規模の一般型デイと、8人前後の小集団のミニデイをフィールドとして、その両施設を併用している利用者を対象とし、その「かかわり方」を比較する事例考察を行う。同一人物の両施設での様態を比較することにより、両施設の比較の条件がより同等になるものと考えられる^{註3)}。

これまで同一対象者の異なる場における様態を調査、比較した研究はなかった。従って、本研究は、単に高齢者通所施設の建築計画的観点においてのみならず、人間と環境の関係を明らかにする観点においても有意であると考えられる。

2-1. 「かかわり方」について

高齢者居住施設等を対象とする建築計画の研究において、コミュ

* 東京大学大学院工学系研究科 客員研究員・博士(工学)
** 東京大学大学院工学系研究科 教授・工博

Guest Researcher, Graduate School of Eng., The University of Tokyo, Ph. D.
Prof., Graduate School of Eng., The University of Tokyo, Dr. Eng.

ニケーション行為を扱う場合、通常、「会話」が指標にされることが多い。しかし、註4)に示すように、本来、人間の対人コミュニケーションのチャンネルは言語によるものだけではない。またプロクセミクス論においては、例えば着席位置や対人距離は重要なコミュニケーションの一つとされている。以上の点から、本稿では、分析対象として、対人コミュニケーション・チャンネルのうち、非音声的・プロクセミクス（空間の行動）、身体動作（視線、ジェスチャー）、音声的・言語的部分（発話）に着目する。具体的には、空間行動として「着席位置」と「行為」、視覚的コミュニケーション行為として「一方的視覚的かかわり（見る）」「双方向的視覚的かかわり（ジェスチャーのやりとり）」、聴覚的コミュニケーション行為として「一方向的聴覚的かかわり（聞く）」「双方向的聴覚的かかわり（会話）」を観察、分析対象とした。本考察では、これらを総称して「場でのかかわり方」又は単に「かかわり方」と呼ぶ。特に視覚的、聴覚的かかわりを総称して「コミュニケーション行為」と呼ぶ。

2-2. 調査対象施設の概要

本研究の調査対象施設は、東京都M市内のミニデイ3施設と、特養併設型のデイサービスセンター2カ所である。ミニデイの概要については既往論文にて詳述した²¹⁾。施設A・B・Cはそれぞれ、既存住宅、被災者用住宅、倉庫を改修の上、転用して使用していた。図1.に各ミニデイの平面図を示す。また特養併設型のデイサービスセンター2カ所の概要については図中に述べる。

2-3. 調査の方法

調査の対象者はミニデイとデイを併用している利用者であった。平成14年4月の時点において、4箇所のミニデイ利用者のうち、デイ併用者が15名いた。そのうち6名が本調査・考察の対象となった。残りの1名は併用施設も小規模施設であり、5名は調査不可、3名は同様に比較調査を行ったものの、データの不備等により本考察の対象から外した（表中略称欄の*印の人）。

各施設における行動観察調査は、平成14年4月から同12月の間に断続的に行った。行動観察調査は、同一対象者に関して、できるだけ近い日を選んでデイとミニデイの両施設において行った²⁵⁾。観察においては、対象者の施設滞在中、その居場所、行為と会話対象、会話内容及び周辺状況を、記録紙（5分に一枚）に記録した。同時に、定点観測ビデオを設置し、利用者の毎様子と周辺状況を終日記録した。なお調査に際しては、本調査前に予備調査を行い、なるべく対象者が重なって利用している日を調査日として選ぶことにより、一人の対象者のある施設での様態を少なくとも3回以上観察し、おおそ定常的な様態を確認しながらデータ採集した。また利用者の行動を解釈するために、本人及びスタッフへのインタビュー調査を適宜行った。そして対象者を全体の利用者の中で位置づけるための属性調査を平成14年11月前後に行った。

2-4. 記述と考察の方法

記述の方法は次の通りである。まず調査によって得られたシートとビデオから、両施設での調査日一日の利用者の居場所、行為内容、会話対象、内容、周辺状況を1分毎のフロー表に抽出した（これを元データとする）。特に会話行為は利用者の間で、その都度、発話者が変わったり新たな利用者が会話に介入する等、ダイナミックに展開するケースもあり、厳密に時間断面で捉えることは難しい。

従って、ここでは前後の状況を見つつ総合的判断によって、会話対象の特定を行った。

次に、各対象者、施設毎に、居場所とコミュニケーション行為の相手、「かかわり方」の種類などを時系列で並べて一覧できるフロー図（6名分、各対象者につき2枚で合計12枚）を作成した。フロー図は1分毎の時間断面によって作成した。当然ながら1分間の中に数種類のコミュニケーション行為が見られる場合もあったが、その場合には、筆者の判断により、最も重要と思われるコミュニケーション行為1種類を抽出して記述した²⁷⁾。

こうして作成されたフロー図をもとに各対象者毎にミニデイと一般型デイにおける「かかわり方」を比較した。

3. 事例考察の対象者の位置づけ

平成14年4月の時点で、ミニデイとデイサービスを併用して利用している人全ての者の身体属性、居住形態、現在の住まいでの居住歴、デイとミニデイの利用日、併用状況を表1.に示す。特に本考察における対象者は網掛けで示した。併用状況のうち、a.系統はデイを主として利用している人、b.系統はミニデイを主に利用している人として分類した。デイとミニデイを併用する利用者は、介護保険の範囲内で一般型デイを利用し、さらに不足するニーズを補うためにミニデイを利用するケース（a.系統）が多いものと思われる。居住歴が10年未満の人は、独居となった後に子供世帯を頼って移住してきた、いわゆる「呼び寄せ」老人であった。

図2は各調査対象施設の利用日における利用者の身体属性の分布と、その中での調査対象者の位置づけを示す。事例06-HCさんは全盲のためADLが低かったが、それ以外の対象者は、一般型デイの利用者の中でも比較的ADLが高く、痴呆の程度も軽かった。

図3は、調査対象者の併用施設の状況を示す。前報²¹⁾において、ミニデイ施設A及びBは「予防型・サロントタイプ」、施設Dは「予防型・アクティビティプログラムタイプ」、そして施設Cは「痴呆特化型」と分類された。「予防型」の施設A、B、Dを併用利用する人は、一般型デイの利用者の全般的傾向の中で、比較的、身体的属性、即ちADLの自立度の高い部類の利用者であった。一方、「痴呆特化型」の施設Cを併用利用する人は、施設型が示すとおり、痴呆の症状が重かったり、ADLが低い場合が多かった。本考察の対象者のほとんどが「予防型・サロントタイプ」のミニデイを利用していた。「サロントタイプ」とは、主にアクティビティプログラムを設けない施設を指す。以上により併用利用者の属性的類型の主要なものは次の3種類となる。

- P1.特に身体的に支障はないが、独居又は日中独居である人
- P2.特に身体的に支障はなく子世帯等と同居しているが地縁のない人
- P3.若干、痴呆の症状を呈しており、子世帯等と同居している人

おおそ類型P1、P2は「予防型」のミニデイ利用者、P3は「痴呆特化型」のミニデイ利用者によく見られるものといえる。

事例考察の対象者をこれらの類型に分類したものを図4に示す。

4. 結果と考察

4-1. 利用者の「かかわり方」の記述とその特徴

まず具体的課題一についての考察を行う。各対象者、施設毎に作成したフロー図の例として、図5.に事例04-TKさんのデータの一例を示す。また図6.にフロー図から各対象者毎にミニデイと一般型デイそれぞれにおける、居場所や主な行為、コミュニケーション行為、

図1. 各施設の平面図（ミニデイA, B, Cのスケール1:300、一般型デイ施設OY, 施設NHのスケール1:400）

表1. 全併用利用者の属性

施設	事例	略称	性別	年齢	身体属性	要介護度	居住形態	居住歴	ミニデイ利用日	デイ利用日	デイ	併用状況	居住形態の凡例
A	⑤	IC	女	86	A-0	要支援	同居※	3年	月火水木金	土	OY	b-1	
			女	81	A-I	要支援	独居	40年	(月・水)	(火・金)		b-2	「同居」は子供世帯との同居を示す。 「同居※」は、子供世帯と同居しているが、日中は独居となる場合を示す。
B	①	KT	女	82	A-0	要支援	独居	44年	水	土	NH	b-2	併用状況の凡例 a-1. 主にデイを利用し、デイ利用日以外にミニデイを利用 a-2. 主にデイを利用し、ミニデイは喫茶目的に利用 a-3. デイ終了後、家族の帰宅までの間に利用 b-1. 主にミニデイを利用し、ミニデイの休日のみデイ利用 b-2. ミニデイはプログラム目的に利用
	②	IS	女	84	A-II	1	独居	63年	木	水金土	NH	a-2	
	③	OF	女	84	A-I	1	同居	4年	火・木	月水金土	NH	a-1	
	④	TK	女	81	C-III	1	同居	7年	木	火金	OY	a-1	
		※	女	81	G-IV	4	夫と同居	55年	(火)	木金土		a-1	
C	⑥	HC	女	91	G-II	2	同居	不明	火・木	水・土	OY	a-1	
			女	不明	不明	不明	同居	不明	水・日	?		a-1	
			女	89	?-IV	3	同居	不明	土	平日		a-3	
			女	90	A-IV	不明	同居	不明	日・祭	平日		a-1	
			女	92	F-III	不明	同居	不明	不明	不明		a-3	
D		※	女	92	B-I	1	同居	6年	金	月		a-1	
		※	女	89	A-0	1	同居※	56年	木	月		b-2	
		※	女	85	A-III	1	同じ敷地内に同居	65年	水・金	月木土		a-1	

施設OY（一般型、痴呆型、金曜及び土曜日利用者分） 施設A（火曜） 施設C（木曜）

図2. 対象者の身体属性から見た位置づけ

図3. 対象者の併用利用施設

類型	特徴	事例
P1	特に身体的に支障はないが、独居又は日中独居である	① ②
P2	特に身体的に支障はなく、子世帯等と同居しているが、地縁がない	③ ⑤
P3	若干の痴呆の症状を呈しており、子世帯等と同居している	④ ⑥

図4. 併用利用者の類型

図5. コミュニケーションフロー図の事例 (04-TKさん、左ミニデイ、右一般型デイにおけるもの)

	ミニデイ (M)	一般型デイ (D)	「かかわり方」の特徴
01 KT female 82 a	<p>全コミュニケーションの相手数/全利用者数 5人 / 5人 = 1.0 会話の相手数/全利用者数 4人 / 5人 = .80</p> <p>プログラム 場所 主な活動 食事 絵手紙がはまる が、カゴを作り 続けた。</p> <p>単位時間当たりのコミュニケーション行為の相手数 27.2人/hour</p> <p>コミュニケーション行為の内訳の比率 S/KM-0.27 VV-0.13</p>	<p>10人 / 31人 = .32 SY(F82a)-0.30 9人 / 31人 = .29 OF(F84 I)-0.13 SI(F91 I)-0.12 S/ST-0.10</p> <p>朝の会 体操 歌う 食事 ビデオ 鑑賞 他の利用者の 誕生日を祝う</p> <p>37.3人/hour</p>	<p>ミニデイには創作活動のプログラムがある日を選び、KTさんと待ち合わせで来る。実際、KTさんとの会話率が21%と高かった。会話の内容は、スタッフやプログラムボランティアを相手にしたものも含めると「作り方」に関するものが46%であった。</p> <p>一方、一般型デイにおいても、切り絵作業に没頭する様子が観察された。SYさんとの会話率が30%と高く、仲のよい様子が窺われた。</p> <p>コミュニケーション内訳は両施設において「会話」の比率が高いのが特徴であった。特に両施設での差異は見られなかった。</p>
02 IS female 84 I	<p>3人 / 4人 = .75 OF(F84 I)-0.36 2人 / 4人 = .50 S/SR-0.42 S/MR-0.10</p> <p>ケーキを 食べる</p> <p>72.0人/hour</p>	<p>10人 / 29人 = .35 OF(F84 I)-0.53 7人 / 29人 = .24 S/TK-0.12</p> <p>折り紙 朝の会 体操 食事 ビデオ を見る うたた寝 ビデオ を見る 誕生日祝い</p> <p>28.8人/hour</p>	<p>ミニデイには木曜日の喫茶の時間に気が向いたときに来る。木曜は事例03-OFさんもミニデイに来ている。利用者の中ではOFさんとの会話率36%と高かった。OFさんは年齢も近く、住居も3件隣であることから、非常に慕っている存在である。尚、ミニデイの単位時間当たりのコミュニケーションの相手数が極端に大きい理由は滞在時間が短かったためと考えられる。</p> <p>一方、一般型デイにおいても、OFさんに追従するような形で場所を移動する等、OFさんを慕っている様子が窺えた。</p>
凡例	<p>コミュニケーション行為の内訳の比率</p> <p>■ V.O. (Visual One way): 見る □ V.I. (Visual Interaction): ジェスチャー等のやりとり ■ L.O. (Linguistic One way): 聞く □ C (Conversation): 会話</p>	<p>会話頻度の高い相手と割合: 名前がイタリックは同席者を示す。S/Iはスタッフ。VIはボランティア。括弧内は性別、年齢、要介護度(ローマ数字、aは要支援)を示す。</p> <p>居場所の選択理由</p> <p>■ 誘導又は指定 ■ 場所の定着 □ 自由意志又は他の利用者に呼ばれる等</p>	<p>プログラム (P.R.) 及び主な行為</p> <p>■ 全員参加 □ 任意参加 ■ 個別P.R. □ 個別活動</p>

図6-1. 各対象者の各施設における「かかわり方」

	ミニデイ (M)	一般型デイ (D)	「かかわり方」の特徴
03 OF female 84 I	<p>5人 / 5人 = 1.0 $KI(F91I)-0.40$ 3人 / 5人 = .80 $TK(F81I)-0.10$ S/KM-0.19</p> <p>48.2人/hour</p>	<p>14人 / 29人 = .48 $IS(F84I)-0.41$ 8人 / 29人 = .27 $S/TK-0.11$</p> <p>34.2人/hour</p>	<p>OFさんはミニデイにおいては場所aのみに滞在した。しかしコミュニケーション行為の対象は他の利用者全員であった。従って、OFさんはミニデイにおいては、場所が一定でありながらも、周囲を見回し、他の利用者やスタッフとの積極的な会話等かかわりを持っていたと言える。</p> <p>一般型デイにおいては場所移動が頻繁に見られた。そしてコミュニケーションの相手は比較的多い方であった。つまりOFさんは一般型デイにおいては、プログラム等の状況によって興味のある場所に移動し、そこで会話や視覚的かかわりを持っていたことを示す。</p>
04 TK female 81 I	<p>5人 / 5人 = 1.0 $OF(F84I)-0.25$ 4人 / 5人 = .80 $KI(F91I)-0.13$ S/KM-0.12 V/IW-0.10</p> <p>48.3人/hour</p>	<p>15人 / 24人 = .63 $MT(F67I)-0.23$ 8人 / 24人 = .33 $MK(M81II)-0.19$ YM(F65III)-0.15</p> <p>19.3人/hour</p>	<p>TKさんはミニデイにおいては、他の利用者と同じテーブルにつきつつ(場所a)編み物行為に没頭していた。</p> <p>一方、一般型デイにおいては、自ら部屋の周辺部のソファ(場所b)に移動し、スタッフに呼ばれない限り、そこで過ごした。そこでは周囲を眺める、編み物等の行為が見られた。</p> <p>コミュニケーション行為の比率のうち、視覚的かかわりが高く、会話が少ないことがTKさんの特徴であった。実際、「他者が会話しているのをちらっと見る」「通りかかった人を見る」行為が、両施設にて非常に多く観察された。</p>
05 IC female 86 a	<p>9人 / 9人 = 1.0 $TK(F72I)-0.20$ 4人 / 9人 = .44 $TO(F79I)-0.47$ S/II-0.12</p> <p>18.8人/hour</p>	<p>6人 / 24人 = .25 $HG(F75II)-0.18$ 5人 / 24人 = .21 $NG(F51II)-0.13$ S/KT-0.20 S/OO-0.15</p> <p>26.1人/hour</p>	<p>ICさんは、ミニデイではカゴ作りが日課となっている。調査日には、T0さんがカゴ作りをICさんに習いにきたため、T0さんに作り方を「教える」会話が41.3%と特に多く観察されたが、通常は黙々とカゴを作る場合が多かったように思われる。</p> <p>一般型デイにおいては、プログラムの注連縄作りを媒介とした会話が36.0%と多く観察された。但し、こちらではつくり方を「習う」ものであった。いずれにしても「物作り」が共通項であり、コミュニケーションの媒介となっていた。</p>
06 HC female 91 II	<p>0人 / 1人 = .00 $S/K-0.56$ 0人 / 1人 = .00 $S/O-0.41$</p> <p>23.2人/hour</p>	<p>4人 / 27人 = .15 $S/TD-0.28$ 4人 / 27人 = .15 $S/MT-0.20$</p> <p>13.5人/hour</p>	<p>HCさんは全盲であった。ミニデイにおけるもう一人の利用者MTさんは耳が悪いことから、コミュニケーションは皆無であった。従ってミニデイにおいては、スタッフとのマンツーマンの状態で、ほぼHCさんが途切れなく話をする様態が観察された。</p> <p>一方、一般型デイにおいても、利用者間の会話は少なく、スタッフとの会話がほとんどであった。しかしながら、その頻度も、単位時間当たりのコミュニケーションの相手数が示すとおり、ミニデイに比べて6割程度であった。</p>

図6-2. 各対象者の各施設における「かかわり方」

その行為の多かった相手とその比率、「かかわり方」の特徴等をまとめたものを示した。また、表2.に各項目毎の特徴を抽出したものを示した。

まず居場所については、ミニデイでは全対象者においてほとんど着座位置の移動がなかった。一般型デイにおいては事例01-KTさんを除いて、5～7箇所の場所移動が見られた。ミニデイでは各対象者の居場所がおおよそ固定している様子が窺える。また場所移動のきっかけは各対象者によって様々であった。

次に主な活動について。両施設において創作活動という共通性をもっていたのが、01-KTさん、04-TKさん、05-ICさんであった。その他の対象者についてはそれぞれの場で異なる活動が見られた。

図6.より単位時間当たりのコミュニケーションの相手数は、対象者6人中4人において一般型デイよりもミニデイでの値が多かった。しかし、この値は全てのコミュニケーション行為を含めたものであり、各対象者によってその行為の内訳の比率が異なることから、単純にミニデイの方がコミュニケーション行為が量的に多く見られたと解釈するべきではなからう^{註8)}。

またコミュニケーション行為の内訳を各対象者間で比較すると、視覚的にかかわりの割合が高い人、聴覚的にかかわりの割合が高い人等、各対象者によって傾向が見られた。同時に各対象者毎にミニデイと一般型デイにおいてコミュニケーション行為の内訳の比率を比較すると、おおむね似たような傾向であるが、ミニデイにおいては聴覚的なかかわりに関するものが、また一般型デイにおいては視覚的にかかわりに関するものが散見される等の差異も見られた。

以上により、ミニデイと一般型デイにおける対象者の「かかわり方」には、場による差異と類似が見られたと言ってよからう。

4-2. 利用者の「場へのかかわり方(態度)」と「場の状況」

上記のとおり「かかわり方」を現象的に比較すると確かに異なっている部分もあるが、その根底にある「場へのかかわり方」、即ち各対象者の場に対する「態度」を含めて考察すると解釈が異なるものとなる。例えば、事例04-TKさんは、一般型デイにおいては自ら部屋の周辺部のソファ(場所b)に移動し食事や歌の時間等スタッフに呼び寄せられない限り、活動の中心から物理的に距離をおいていた。一方、ミニデイにおいては他の利用者と同じテーブルにつきつつも編み物行為に没頭していた。TKさんのコミュニケーション行為の特徴は比較的、会話の比率が少ないことであった。これらの様態

は次のように解釈できるものと思われる。一般型デイにおいては着席位置という空間行動として非積極的ともいえる「態度」が表出していた。一方、ミニデイでは自由な座席選択ができない代わりに編み物行為に没頭し、いわば見えないバリアをつくることによって、その「態度」が表出していたものと考えられる。つまりTKさん自身の場への「態度」は共通しているが、その「場の状況」によってTKさんが「適応」した結果、異なる「かかわり方」が見られたものと捉えられるであろう。なお「場の状況」とは物理的空間の規模や構成、設えをはじめ、活動プログラム、他の利用者の存在やその活動等、対象者の周囲を取り巻く静的・動的な環境要素全体を指す。

同様に、事例03-OFさんの場合、ミニデイにおいては着席位置が一定でありながらも、周囲を見回し他の利用者やスタッフとの積極的な会話をしていた。一方、一般型デイにおいては、プログラム等の状況によって、興味のある場所に移動し、そこで会話や視覚的にかかわりを持っていた。これらの「かかわり方」は場所移動の有無に差異があるが、どちらもOFさんの好奇心が多く、消費者的な「態度」がその「場の状況」に合わせて現れたものと解釈できる。

以上により、各対象者の「かかわり方」の様態は、単純に場から影響を受けた結果として見るのではなく、むしろ各対象者がそれぞれの「場の状況」に「適応」した相互作用の結果として見るができるものと思われる^{註9)}。但し、事例06-HCさんの場合は「適応」が難しかった事例であろう。つまり、HCさんは全盲のため視覚的に周辺状況を把握することができないことから「適応」が難しく、コミュニケーションの相手数も少なくなったものと思われる。従って、全ての利用者が「適応」できるというわけではなく、その身体属性にもよるものと考えられる。

個々人の「場へのかかわり方(態度)」と「かかわり方」を合わせて「その人らしいかかわり方」と呼ぶことにする。その人がデイヘドのような「態度」で臨み、実際どのような「かかわり方」を取ったかの組合せは個々人によって固有性が見られたからである。

4-3. 併用利用者の類型と「場へのかかわり方(態度)」

この項では観察された「かかわり方」の要因部分とも言える「場へのかかわり方(態度)」について考察する。「場へのかかわり方」は個々人の内面的要素のため厳密には論証が難しい。そのため前項では両施設における「かかわり方」から類推的に「態度」を案出したが、この項ではより簡略に推測するための別の方法を試み

表2. 各対象者の「かかわり方」の類似と差異、「場へのかかわり方(態度)」 ※網掛けは類似部分を示す。

事例	利用日	場所移動	主な活動	コミュニケーション行為の内訳	特にコミュニケーションの多かった相手	類型	場へのかかわり方(態度)
① KT	M	PRを選んで来る	2カ所: ほぼ一定	創作PR(カゴ、絵手紙)	会話の比率が高かった。	P1	+1
	D	1日/週	2箇所: 体操以外一定	創作PR(切り絵)	会話の比率が高かった。		
② IS	M	喫茶時間のみ	一定	喫茶、会話	会話、「聞く」が多かった。	P1	+1
	D	3日/週	6箇所: 主にOFさんに付いていった。	PR(体操、ビデオ鑑賞)	会話が早い、視覚的にかかわりも見られた。		
③ OF	M	2日/週	一定	会話、刺し子作業	会話の比率が多かった。「聞く」も若干見られた。	P2	±0
	D	4日/週	6箇所: PRや興味に従って移動した。	PR(体操、ビデオ鑑賞)	会話の比率が高かった。視覚的にかかわりも見られた。		
④ TK	M	1日/週	一定	縫い物	視覚的にかかわりが多い。	P3	-1
	D	2日/週	5箇所: スタッフに呼ばれる以外は場所bに留まった。	見回す、編み物	視覚的にかかわりが多い。特に双方向的なものが見られた。		
⑤ IC	M	5日/週	3箇所: お茶の時間に不参加のため脇にずれた。	カゴ作り	会話が早い、「聞く」も若干あった。	P2	±0
	D	1日/週	7箇所: 他の利用者に手招きされたり、PRによる移動	創作PR(注連縄)	ほとんど会話であった。		
⑥ HC	M	2日/週	3箇所: 但し、食事、入浴以外一定。	会話	会話のみであった。	P3	-1
	D	2日/週	7箇所: 全て誘導による。	昼寝、PR(体操、ゲーム)	ほとんど会話であった。		

る。第3章で分類した併用利用者の類型からの類推である。この方法が適していると思われる理由は、自らの意志で利用しているか、或いは家族の意向で利用しているのかは、利用者のモチベーションに強く作用するものと考えられるからである。ここでは、まず仮説的に、自己の意志でデイ又はミニデイを利用しているP1型を積極的態度(+1)、家族の意向で利用しているP3型を消極的態度(-1)、その両者と考えられるP2型を(±0)とする。(±0)は必ずしも家族の意向ではないが自らの積極的な意志とも言い切れない呼寄せ老人独特の心理を反映した値である。その上で、再度、各対象者の各施設毎での「かかわり方」を検証する。例えば、04-TKさんの態度は(-1)と仮定されるが、これは調査結果をもとに判断した前項での説明に矛盾を来さない。03-OFさんの態度は(±0)と仮定され、同様に、その態度は前項の捉え方において矛盾を生じない。従って、これらの仮定は正しいものと推測され、併用利用者の類型から「場へのかかわり方(態度)」がある程度、類推可能であると言える^{註10)}。但し、この推測方法はあくまで簡易的に「場へのかかわり方」を推測するものであり、厳密なものではない。また調査対象者を見る限り、両施設に対する「場へのかかわり方」に差異は見られなかった。

4-4. 場に特有の「コミュニケーション状況」

4-2.において「かかわり方」の様態は利用者と「場の状況」の相互作用と見られることを指摘した。換言すれば、利用者と「場の状況」は相互依存的とも言える。しかしながら、ミニデイ及び一般型デイそれぞれの場に特有の「コミュニケーション状況」が存在したのも事実である。図6.でコミュニケーション行為の内訳の比率を見ると、各対象者毎に違いはあるものの、比較的ミニデイにおいて「一方的聴覚的かかわり」が、一般型デイにおいて「視覚的かかわり」が見られたことが分かる。本項では課題二に対する考察として各施設型に特有の「コミュニケーション状況」について述べる。

まず「予防型サロンタイプ」のミニデイに特有の「コミュニケーション状況」の一つは「聴覚的かかわり」に関するものである。例えば「他の利用者どうしの話が耳に入ってくる状況」である。具体例を挙げると、事例01-KTさんの場合、作業をしながら他の利用者がTVCMのおせち料理について感想を漏らしたことに笑い返した場面があった。また事例04-TKさんの場合、他の利用者どうしがホテルの話をしているときに、突然「それはどこのホテル？」と言って話に介入した場面があった。

これに類するもので最も「予防型サロンタイプ」ミニデイに特有の「コミュニケーション状況」が、会話がその場全体の利用者に突然広がる状況である。これを「ダイナミックな会話展開」と呼ぶことにする。この現象の生起要因の一つとして「物理的近接性」が挙げられる。一つのテーブルを挟み、お互いが近接した位置関係では、ひそひそ話でない限り、ある程度の聴力があれば他者の話が聞こえてくるからである。もう一つの要因として、一つのテーブルを囲む利用者の集団規模があると思われる。具体的には5人～8人程度の集団で「ダイナミックな会話展開」が観察された。さらにもう一つの重要な要因として、利用者どうしの「相互認識度の高さ」が考えられる。図6.中の各人の全コミュニケーションの相手数は、事例06以外は一般型デイよりもミニデイにおけるものの方が高いことから、ミニデイにおいては各利用者間の相互認識度が高いものと言える。従って会話への介入も起こりやすいものと思われる。

一方、一般型デイにおける「聴覚的かかわり」、特に会話は同じテーブルに着いた人どうしで見られることが多かった。なぜならば、図6.に示したとおり、会話頻度が10%以上のコミュニケーションの相手を見ると、ほとんど同じテーブルに同席した利用者(イタリアック表記)であるからである。これは、一般型デイOY、NHにおいて、利用者は、朝の会や体操、レクリエーションゲーム等の全員参加型の活動以外の時間帯に、施設OYでは4つ、施設NHでは4～5つのテーブルに分かれており、主にその時間帯に同席した利用者間で会話が展開される場合が多かったことを示す。各テーブル間での「聴覚的かかわり」はほとんど観察されず、各テーブル内で独立的に会話が展開されていた。もちろん必ずしもテーブル内の全員で会話が展開されるわけではなかった。従って、一般型デイの場の「聴覚的かかわり」の特性は、各テーブル内において会話が展開されるものの同時多発的な集積であると言える。

また、一般型デイにおける特徴的「視覚的かかわり」の一つとして、「自己やそのグループ以外の人々の様子を眺める行為」が見られた^{註11)}。例えば、事例01-KTさんの場合、絶えず自分のバッグの所在を尋ねつづける他の利用者の様子を見て話題にする場面があった。また事例04-TKさんの場合、鍵のかかったお風呂の扉を開けようとする他の利用者の様子等、周囲の様子を見る行為が度々と観察された。これらの事例を、ここでは「視覚限定的かかわり」と呼ぶことにする^{註12)}。この「かかわり方」の要因としては、一般型デイはある程度の空間規模を持つことから「視覚的眺望性」が発生すること、なおかつ、ある程度の集団規模があることから必然的に直接話をしたことがない間柄も存在すること等が考えられる。

以上で述べたミニデイ、一般型デイでの「コミュニケーション状況」をまとめる。まず、予防型サロンタイプのミニデイは、前報で詳述した「パラレルな場」^{註13)}と合わせて「各利用者が別々の活動をしながらも、時折、ダイナミックな会話展開等を持ちつつ、一つの場を共有する場」と言える。一方、一般型デイは「各テーブル毎に局所的に会話が起きる、その同時多発的な集積であり、各テーブル間は視覚的なかかわりでつながっている場」であると言える。

以上、本項では各施設型に特有な「コミュニケーション状況」の指摘とその要因の考察を行った^{註14)}。

4-5. 「かかわり方」から見た通所の場の質に関する試論

上記の考察結果は、結局のところ「かかわり方」の観点から、集団規模や空間規模の大きい一般型デイと小規模なミニデイのどちらが望ましいかという二項対立的な結論を導くべきではないことを示しているものと思われる。なぜならば、両施設で見られた対象者の「かかわり方」の様態は、対象者がそれぞれの「場の状況」から単純に影響を受けているものというよりも、対象者がそれぞれの「場の状況」に対して「適応」しているものと捉えられたからである。またミニデイと一般型デイに特有の「コミュニケーション状況」も質的に異なることから単純にどちらがよいとは言えないであろう。むしろ重要なのは、各対象者は必ずしも「場の状況」に「適応」できたわけではないことから、それぞれの構築環境の中で、いかに各個人にとって負荷がなく満足できる形での「その人らしいかかわり方」が可能な「場の状況」を生み出していくかであると思われる。そのような「その人らしいかかわり方」はこれまでの通所施設における集団的なかかわり方に代わるべきものであると思われる。

る。例えば、事例04-TKさんに見られたような積極的とはいえないが「その人らしいかかわり方」もある。そのような、いわばパッシブコミュニケーションの状況をも持つことも、広範なコミュニケーションレベルを持つ場につながり、ひいては「その人らしいかかわり方」を包含しうることになると考えられる。しかし、このことは単純に多様な設えの場を肯定しているわけではない。ミニデイのような小さな場においても、例えば「パラレルな場」のように状況次第では多様な「かかわり方」を内包しうるのはこれまでに見たとおりである。近未来的には、一般型デイ、ミニデイそれぞれが、質的に異なるコミュニケーション状況を持ちうる場の特性を生かし、利用者の好みに応じて選択できるような形が望ましいと思われる。

5. 結論

本稿ではミニデイと一般型デイという異なる場において利用者のコミュニケーション行為に差異はあるのかという問題意識から、両施設の併用利用者を対象とした事例考察を行った。その結果、利用者の「かかわり方」に差異が見られる事例もあった。しかしながら、各対象者の「場へのかかわり方（態度）」を含めて考察すると、両施設における「かかわり方」の現象的な差異は、各対象者の「場の状況」への相互作用的「適応」の結果と捉えることができた。本研究では特に「かかわり方」と「態度」をまとめて「その人らしいかかわり方」として重要視した。そして「かかわり方」の観点から、集団規模や空間規模の大きい一般型デイと小規模なミニデイのどちらが望ましいかという二項対立的な結論を導くべきではなく、むしろ近未来的には、ミニデイ、一般型デイそれぞれが場の特性を生かしつつ、いかに「その人らしいかかわり方」が可能な「場の状況」を生み出していくかが重要であると考えられた。

6. 今後の課題

本稿では、経時観察による対象者の「かかわり方」の時系列変化を明らかにするまで至らなかった。利用者の加齢に伴う身体状況の変化によって「かかわり方」がどのように変化していくのか、また「場へのかかわり方（態度）」にどのような変化をもたらすのか等については省察できなかった。これらは長期的な利用を可能とする施設計画に知見をもたらすものと思われる。今後の課題としたい。

謝辞

調査にご協力いただきましたM市および各施設の利用者や運営者、スタッフの方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

註

1) 「要介護状態等となった場合においても、その利用者が可能な限りその居宅において、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、必要な日常生活上の世話及び機能訓練を行うことにより、利用者の社会的孤立感の解消及び心身の機能の維持並びに利用者の家族の身体的及び精神的負担の軽減を図るもの」とされている。引用元：指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準、平成11年3月31日厚生省令第37号、第7章、通所介護、第1節、基本方針、第92条

2) 現在、高齢者通所施設は介護保険によるものが主流であるが、各自治体独自の試みも見られる。本稿の調査対象のミニデイもその一つである。これらのミニデイは一般型デイにおいて満たされないニーズを補完している。例えば、身体的に不自由はないが独居である高齢者の社会的接触のニーズ（予防型ミニデイ）、或いは一般型デイで不足気味な痴呆性高齢者のケアニーズ（痴呆特化型ミニデイ）等。詳細は文献1）参照。

3) たとえ同一人物であっても一般型デイとミニデイを同じ位置づけで利用していない場合も想定されるが、調査対象者においては大きな差異は見受けられなかった。

4) 大坊は対人コミュニケーション・チャンネルを以下のように分類している。以下、文献2）から引用。

- 1) 言語的（発言の内容・意味）
- 2) 近言語的（発言の形式的属性）

- 非音声的 3) 身体動作（視線、ジェスチャー、顔面操作）
- 4) プロクセミックス（対人距離、着席位置など）
- 5) 人工物の利用（被服、化粧、アクセサリ、道路標識など）
- 6) 物理的環境（家具、照明、湿度など）
- 5) 各事例考察者の調査日は次のとおり（以下、事例番号、調査日、調査施設の順に記す。調査日は特記なき場合、2002年）。01-12/18@B,11/9@NH,02-2003/5/1@B,11/30@NH,03-11/28@B,11/30@NH,04-12/26@B,12/6@OY,05-12/10@A,12/7@OY,06-12/12@C,12/14@OY。尚、事例02-ISさんのデータは、当初、施設Bにて2002/10/24、施設NHにて2002/10/19に収録した。しかし、ともにOFさんが不在の日であった。ISさんにとってOFさんの存在が大きいとの判断により、施設Bのデータは別途収録したものをを用い、施設NHのデータはOFさん用収録したデータをISさん用にも用いることとした。

6) ADL及び痴呆のスケールは下記を用いた。

■ADL自立度のスケール（Katz,S.）

- A：食事、排泄コントロール、移動、トイレ使用、更衣、入浴の自立
- B：上記1項目以外は自立
- C：入浴と他の1項目以外は自立
- D：入浴と更衣と他の1項目以外は自立
- E：入浴と更衣、トイレの使用と他の1項目以外は自立
- F：入浴と更衣、トイレの使用、移動と他の1項目以外は自立
- G：6項目すべて介助を要する
- O：2項目以上に介護を要するが上記にあてはまらない

■痴呆スケール（BERGER）

0：痴呆なし

- I：物忘れがあるが、日常環境ではほとんど問題なし
- II：既知の環境においては自立している
- III：既知の環境においては指導、助言を必要だが、指示のみで十分である
- IV：指示だけでは不十分で、具体的な介助を必要とする
- V：日常行為全てに介助が必要であり、言語による会話が成立しない
- VI：寝たきり車いすに座ったままで言葉に無反応。身体接触のみに反応。

7) この際、（省略されたコミュニケーション行為数/元データのコミュニケーション行為数）を「省略率」とすると、省略率は各事例で0%～38%となり、各対象者のコミュニケーション傾向によってかなりの違いが現れた。省略率が高いほど、データ分析に利用したデータ以上に、実際にコミュニケーション行為が観察されたことになる。観察された全てのコミュニケーション行為から、1分毎のデータを抽出する際に、筆者が任意で抽出したことによって、データの客観性及び信頼性に影響を及ぼす可能性も考えられる。しかしながら、実際に観察された全てのコミュニケーション行為を元にした分析と、1分毎のデータを元にした分析では、コミュニケーション行為の絶対数そのものにはもちろん差異があったが、コミュニケーション行為の比率は、事例02-ISさんの場合のみ7-8%の差異が見られた他は、0-2%の差異しかなかった。従って、1分毎のデータを元にした分析でも比率を扱う場合には客観性と信頼性があるものと判断した。尚、各対象者毎の省略率は次の通りである（以下、事例番号、ミニデイでの省略率、一般型デイでの省略率の順）。01-2.9%,2.4%,02-32.7%,21.8%,03-37.6%,16.9%,04-19.6%,10.1%,05-13.8%,23.7%,06-0%,0%。

8) 一つにコミュニケーション行為に対して、複数人のコミュニケーション対象者が数えられる場合もある。例えば、複数人で会話する場面、或いはそれを見ている場面等。

9) 本考察では、長期間にわたる観察調査によって、利用者がそれぞれの場の状況に適応していく過程を見ることはできなかった。従って利用者と環境の適応過程を相互浸透的なものと実証的に結論づけることは難しい。

10) 利用の動機がどのようなものであれ、利用しているうちに、自ら積極的な意義を見つけて、態度が変わってくることもあり得ると思われる。残念ながら今回の調査ではそこまでの実証を行うことはできなかった。

11) Lawtonは、老人にとっての都市の特性として、ドアの前や公園のベンチに座ることによって、車や歩行者が絶え間なくうつろうシーンという刺激を得られることを例示して、「自己の周囲におきる出来事」という刺激の存在を指摘している。文献3）参照。

12) 「視覚限定的かかわり」を抽出するに当たって対象者どうしは会話による直接の「かかわり」がほとんどないものとした。つまり直接の会話を行う相手どうしの「視覚的かかわり」は「視覚限定的かかわり」とは区別した。

13) 予防型サロントタイプのミニデイの場の特性として「パラレルな場」即ち、「一つの場を共有しつつ、各利用者が別々の活動をする」状況を指摘した。文献2）参照。

14) ここに示した「コミュニケーション状況」は事例観察によって見られたものだけであり、その全てではないであろう。

参考文献

- 1) 西野達也、長澤泰：小規模高齢者通所施設の利用実態と空間の使われ方について、日本建築学会計画系論文集第581号 P41-48、2004.7。
- 2) 大坊都夫：しぐさのコミュニケーション、サイエンス社、1998。
- 3) Lawton, M.P.: *Planning and Managing Housing for the elderly*. New York.A Wiley-Interscience Publication,1975。

（2004年6月28日原稿受理、2004年12月20日採用決定）